



## 慶應義塾大学ビジネス・スクール

# 南三陸ホテル観洋 — 東日本大震災と共に価値の創造 —

5

## 南三陸ホテル観洋

10

### ホテルの生き立ち

仙台から車を走らすこと 2 時間弱、国道 45 号線を北上したところの高台に南三陸ホテル観洋はある。南三陸ホテル観洋は、鮮魚仲買業を営む株式会社阿部長商店の関連会社朝日観光株式会社のもと、昭和 47 年 7 月に開業された老舗の観光ホテルである。昭和 52 年に阿部長商店に吸収合併されたあと、幾度かの増改築を重ね、現在は客室数 244 室 1,300 名収容可能な大規模ホテルとなった。また、平成 16 年と平成 18 年に相次いで温泉が開湯し、三陸海岸に面しながら温泉を楽しめるホテルの先駆けとなった。

ホテルが所在する南三陸町は、三陸のリアス式海岸という絶景と水産資源を有するものの、これといった観光スポットは少なくアクセスもあまりよくない。また近くに仙台からのアクセスも良い日本三景の松島があり、宮城県の北部には温泉の東の横綱として名高い鳴子温泉が控えているため、南三陸町の観光業はこれらの地域にくらべ遅れをとっている状況であった。南三陸ホテル観洋も、経営母体の阿部長商店が営む水産業と、南三陸町の豊富な水産資源を生かして、順調に経営を行なってきたとはいえ、宿泊客のほとんどは一泊の短期滞在型である。

阿部憲子女将はつねづね、観光業は地域の連携なくしては成り立たないと考えていた。ホテルで使う食材は三陸の豊かな水産資源から得られるものであるし、ホテルが繁盛することによって地域経済の活性化につながると思っていた。また、ホテルを気に入ってもらい、リピート利用し

15

20

25

25

本ケースは、東北学院大学教授 佐々木郁子と慶應義塾大学ビジネス・スクール准教授 村上裕太郎がクラス討議の資料として作成した。なお、このケースは 2012 年 2 月現在の事実にもとづいた記述である。

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクール（〒223-8526 神奈川県横浜市港北区日吉 4 丁目 1 番 1 号、電話 045-564-2444、e-mail: case@kbs.keio.ac.jp）。また、注文は <http://www.kbs.keio.ac.jp/> へ。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法（電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない）による伝送も、これを禁ずる。

30

Copyright© 佐々木郁子、村上裕太郎 (2012 年 3 月作成)